

無名の三流テイマーは王都のはずれで

のんびり

暮らす

いつでも、国家の要職に
就く弟子たちがなぜか
頼りて暮らす。

4

Ryuuichi Suzuki

鈴木竜一

illust.

Aito



CHARACTERS

主な登場人物

タマ

十数年前、パーツとともに旅をしていた猫型魔獣。

ダリアス

元弟子の一人。
パーツと同じ
王聖六将候補。

クロス

お調子者のリザードマン。
パーツと契約する魔獣の一体。

ノエリー

パーツの元弟子で聖騎士。
パーツを幹部候補に
推薦する。

パーツ

しがない
三流冒険者のテイマー。
セラノス王国で
新設される国防組織の
幹部「王聖六将」
候補に抜擢される。

クウタ

パーツと再契約することに
フェニックス
なった不死鳥。

シロン

パーツの相棒である白狼。
はくろ
面倒見が良いタイプ。



メイ



ロザリン



フィオナ



ミネット



ティオグ



アリアス

第一章 バカンスに行こう！

振り返れば、この数カ月の間に俺——バーツの人生は大きく変化した。

ほんのちよつと前までは冒険者として採集クエストを中心に立ち回り、慎ましく生活をしてきたのだが、気がつけば大国セラノスの新生国防組織の幹部、おうちほろくしやう王聖王八将としてしょうらい招聘されている。

きっかけは、かつてテイマーとしての心得を教えた八人の弟子たちだった。

その中のひとりであるノエリーが、俺を推薦してくれたのだ。

俺をさが捜してわざわざ冒険者ギルドまでやってきた時はもう驚いたよ。

彼女たちは幼い頃にした約束を守り続け、今や国を代表する大物に育った。

もう三流テイマーである俺なんてとつくに追い越しているはずなのだが、未だに師匠や先生と呼んでくれている……とても嬉しいし、ありがたいんだけど、そのおかげで周りからちよつと勘違いされている節があるんだよな。

でも、せつかくみんなが王都へ呼んでくれたのだ。

期待に応えるためにも、シロンやクロス、そしてかつて一緒に行動していたクウタやシロといっ

たパートナー魔獣たちと一緒に難題へと挑んでいく。

最近もレドルという町でひと騒動あったけど、せいとも無事に解決。王都へ戻ってきた俺に、再び平穏な日々が戻ってきた。

「いやあ、今日もいい天気だなあ」

運河沿いにある小さな小屋から引越し、新たな住まいへと移ってきた。

その新しい我が家から出て、全身を解すように伸びをする。

あの大騒ぎが嘘だったかのように、この時間帯はとても静かで落ち着けるのだ。

ただ、しばらくすると中央通りの方が騒がしくなってきた。

「おっ？ 今日もやっているな」

ここからでは詳しい通りの様子は分からないけれど、きっと多くの商人や客で賑わっていることだろう。ミネットも最近は商売が以前よりもやりやすくなったと言っていたし、俺も頑張った甲斐があったってものだ。

中央通りの方へ視線を送っていると、先に目覚めていたパートナー魔獣たちがやってくる。

「旦那あ！ おはようっす！」

「今日は少々遅い目覚めだな」

弟子たちと別れた後、冒険者としての活動を再開した俺が契約をした、リザードマンのクロスと

白狼はくろうのシロン。

「まだこの前の戦いの疲れが残っているんですか？」

「ご主人、あまり無理はしないように」

弟子たちと別れる前——俺が駆け出しの頃から一緒に戦ってきた不死鳥フェニックスのクウタと白虎ホワイトタイガーのタマが続く。

どちらも元はどこにでもいる普通の魔獣であったが、今や揃って神獣という最高ランクの強さを誇るようになっていた。

神獣をタイムしてパートナーにするのは、ティマーにとってひとつの大きな目標であると言える。俺の場合、ひと昔前に組んでいた者たちが鍛錬を重ねて神獣になったという極めて稀なケースだったため、神獣使いという実感はほとんどなかった。おまけにクウタもタマも、普段はどこにでもいそうな鳥と猫の姿にいる。

かつてともに生活していた頃のサイズで懐かしんだけどさ……外見から威厳がごっそり抜け落ちているので、神獣だっことを忘れちゃうんだよね。神々しさよりも可愛らしさが先に出ちゃうから。

とにもかくにもこれで万々歳。

俺はティマーの指導者として今日も後進の育成に励む予定でいる。

「今日はデリックたちと模擬演習をするんだったな。——おや？」

本日も張り切つていこう、と気合を入れようとした時、こちらへと歩いてくるふたり組の男が視界に入った。

どちらも騎士団の制服を身にまとい、俺を発見すると何やらふたりで話している。
……どう見ても、ただの朝の挨拶あいさつに来たつて面構えと雰囲気じゃないな。

「主よ」

シロンも彼らの存在に気づいたようだな。

これを皮切りに、他の魔獣たちも騎士たちがこちらへ迫っていることを知る。

「戻ってきて早々に、騎士団から直接の呼び出しみたいだ」

「今度は何の用つすかね？ また何かトラブルとか？」

「うーん……こればかりは行つてみないと分からないな」

ノエリーやラングトン騎士団長から伝えられた俺の主な仕事は、若手テイマーの育成。次代を担う新星たちの才能発掘や鍛錬の相手をするのが役割だ。しかし、それ以外にも悪党退治に参加するなど、臨機応変にやつていくつて感じだな。

でも俺の経験上、ああいうしかめっ面をしているヤツらが訪ねてきた時というのは、たいていの場合、ろくでもない案件なのだが……果たしてどうかかな？

「おはようございます、バーツ様」

「ああ、おはよう」

近付いてきて挨拶をする騎士に返事をするが、この「バーツ様」という呼ばれ方はいつまで経つてもなかなか慣れない。

あまり人前で偉ぶつたりするのが得意じゃないっていうのもあって、なんだか自分が呼ばれたつて気がしないのだ。

しかし、王聖六将という立場上、俺はあらゆる場面で名前に「様」をつけられるし、多くの者たちから敬語で応対される。妙なくすぐつたさがあるけど、こいつにも慣れていかないとな。

「今日はどうしたんだ？」

「ラングトン騎士団長がお呼びです」

「騎士団長が？ 一体何の用だ？」

「詳細につきましては、騎士団長が直接お話になると」

ふうむ……ラングトンからの呼び出し、か。

厄介やっかいごとで確定みたいだな。

「分かった。すぐに支度を整えるから少し待っていてくれ」

「かしこまりました」

……どうにも、この空気は苦手だなあ。

それでも、やると決めたからにはしつかりしないと。

とりあえず、パートナー魔獣の中でも小柄で応用の利くクウタを連れて、俺はラングトンの執務

室を目指すのだった。

朝市で賑わう王都中央通りを横目に見ながら、詰め所に到着。

顔見知りの門番と挨拶を交わしてから、ラングトンの執務室へ入る——と、そこには先客が。

「あれ？ ミネット？」

「こんにちは、バーツ先生。先日は本当にありがとうございました」

礼儀正しくお辞儀をする、元弟子のミネット。

そういうえば、レドルでの一件は彼女が報告をしてくれることになっていたが……今日呼び出されたのは何か確認事項ができたからなのか？

そう思っていると、座っていたラングトンが口を開く。

「君がここへ来てから、我ら騎士団はずっと世話になりっぱなしだな」

「そ、そんなことはないさ」

「だが、雪山の件もレドルの件も、君なしでは無事に解決できたかどうか……まだ正式に王聖六将としてのスタートを切っていない段階で、すでに国家への貢献度は凄まじい。国王陛下も感心していらっしやっただぞ」

「さすがはバーツ先生ですわね」

「おいおい、持ち上げすぎだつて」

ミネットまで加わって……本当に大袈裟おおげさだなあ。

正直、こちらの意図しない形で解決したって流れが多いからな。

とはいえ、褒められるのは気分的に悪くない。

「それほど頑張ってくれている君に、今日はささやかながらお礼をしたいと思いますってね」

「お、お礼？」

俺が首をかしげると、ミネットが頷く。

「ええ。実はわたくし、とあるリゾート地に別荘がありまして、そこにバーツ先生やかつての弟子たちを集めて同窓会という名のバカンスをしようかと」

「ほお……」

それは魅力的な提案だ。

つまり、ノエリーをはじめとした他の元弟子たち——メイ、フィオナ、ティオグ、アリアーヌ、そして昨日再会したロザリンも来るってわけか。

「それだけではありません。先生が気になっていた、最後のひとりともそこで落ち合うことになっています」

「っ！ あいつが……」

ついに最後のひとりと再会の時が来たというわけか。

ふと、俺はこれまでの経緯を思い出してみる。

かつて、教会でともに育ち、そして俺がティマーとしての心得を伝授した八人の弟子たち。さまざまな事情で親のもとを離れた彼女たちに、最初はシスターにカッコいいところを見せたいという下心からティマーの指導を始めたんだっただけだ。

けど、それは俺にとつても生き方を大きく見直させてくれるきっかけとなった。

結局はそのシスター・エヴェリンがとんでもないクズの奴隷商で、教会に子どもを集めては変態貴族どもに売り払っていたことが発覚。

八人はなんとか間一髪のところであげられ、俺はみんなをセラノスの教会へと預けた。

生い立ちに関係なく、立派に育って幸せになってほしい。

そう願って、有り金全部を置いてきた。

おかげでしばらくは、まともな食料も手に入れられず苦勞したけど……その甲斐もあつてかみんな俺の想像を遥かに超越する成長ぶりを見せ、今となってはそれぞれセラノスには欠かせない優秀な人材となり、この国を支えている。

これらは彼らの努力の賜物であるのだが、肝心のノエリーやミネットたちは口を揃えて俺のおかげだと言ってくれる。

指導者としては大変誇らしい言葉なのだが、その影響で休む暇もろくになく働き続けているらしい。

だから、これはみんなにとつてもいい休養の機会となるはず。

あと……ついに最後のひとりともそこで落ち合う手筈てはすとなつているらしい。

ノエリー、ミネット、メイ、フィオナ、ティオグ、アリアーナ、ロザリン——ここまで七人との再会を果たし、残すは最後のひとりだけ。

おまけに彼もまた、王聖六将の候補者として名が挙げられているんだっただけ。

その名はダリアスと言つて、とても正義感が強く、真面目な男だった。

少し何を考えているのか分からないところがあつたものの、仲間想いで優しく、最年長ということもあつて全員から兄のように慕われていたな。

「ダリアスには本当に……何度も驚かされてきましたわ」

懐かしむように、ミネットは目を閉じてそんなことを言う。

確かに、あいつはそういうタイプだったな。

なんていうか、いい意味で常識が通用しないとか……それはさすがに無理じゃないかなつていうことでも割とあつさりやり遂げてしまうのだ。

こちらはひとつしか教えていないのに、ダリアスは自分で考え、それを十にも二十にもしてしまふ才能の持ち主だった。天才肌まつて言えはいいのかな。

「俺と離れた後も、ダリアスは凄まかったみたいだね」

「それはもう。王聖六将という組織を立ち上げようという話になつた際、真つ先に候補に挙がつたのは彼でしたし」

やはりそうか。

まあ、仮に俺が国王という立場にいて、セラノス国内にあいつのような人間が存在していると知ったら、間違いなく同じような判断をすると断言できる。

それくらい何もかもが突出していたのだ、彼は。

「特に驚かされたのは、王聖六将の候補者に指名された時のエピソードですわね」

「えっ？ そんなのがあるのか？ 俺はまだ聞かされていないな」

そう伝えると、ミネットは俺が王聖六将の候補者に選ばれた舞台裏を教えてくれた。

「彼は国王陛下に、王聖六将に就任する条件をひとつ提示しました」

「条件……？ 一体何なんだ？」

国王に条件をつけるとは、かなり強気な態度だな。

……しかし、彼ならばそれもやりそうだっていう変な確信がある。

「彼が提示した条件というのは——王聖六将にバーツ先生を招くというものでした」

「お、俺を!?」

驚いたな。

てっきりノエリーが言い出しつべなのだとばかり思っていた。

話を聞いていると、俺を捜して各地を回っていたのは彼女らしいし、てっきりノエリーが推薦人だとばかり。

「きっかけはノエリーじゃなかったのか」

「あの子はダリアスの言葉を耳にして大賛成し、すぐに先生を捜しに出ましたからね。ただ、最初に先生の名を口にしたのは彼ですわ」

「そうだったのか……」

直接見たわけじゃないけど、その光景は想像しやすかった。

それはともかく……つまり、すべてのきっかけとなっていたのはダリアスだったのか。

再会を果たしたあかつきにはありったけの感謝をぶつけてやらないとな。

「あいつが俺を……」

なんだかジーンと来るな。

ダリアスは本当に規格外な弟子で、正直、俺みたいな三流タイマーが彼の師匠と名乗るのはおこがましいとさえ感じるほどだ。

きつと、人の上に立つ人物として必要不可欠な要素を全部持っているのだろう。

初めて会った時は俺よりもずっと年下でまだまだ幼かったけど、彼の口にする言葉に物凄い説得力があって、気を抜くと子ども相手に敬語で接するくらいだったからな。

だから、彼が王聖六将のひとりだと聞いた時は驚いたと同時に凄く納得はしていた。

むしろダリアス以外の誰を選ぶんだよって、今なら声を大にして言える。

そんな彼が、自分の王聖六将入りの条件として、俺も一緒に候補にするように言ってくれた……

おかげで俺の人生は一変したよ。

こうしてみんなとも再会できたわけだし。

「ダリアスが参加してくれるなら、今からとても楽しみだよ」

「彼もわたくしと同等かそれ以上に多忙の身ですが、ずっとバーツ先生には会いたがっていましたからきつと合流すると思いますわ」

そうなんだよなあ。

本当にみんな忙しそうにしているんだよ。俺なんてつい最近まで、その日暮らしに近い生活をしていたっていうのに……弟子の成長ぶりに感動すると同時に、これまでの自分の生き様がちよっと情けなくも感じるよ。

……気を取り直して。

バカンスのスケジュールだが、一週間後に出発することとなった。

期間は三日間。

短いようにも感じられるが、セラノスの重要なポストに就いている者が多いだけに、これが限界だという。

俺としてはもうちよつと彼らに余裕ある生活を送ってもらいたいが、なかなかそうもいかないらしい。

ならば師匠として、ティマーという立場から彼らを後押ししたい。

役割としては以前頼まれた通り、後進の育成と有事の際の対処。この方面から、騎士団や魔法兵団の手助けができるようにしたい。そうすれば、ノエリーやメイも少しは激務から解放されるはず。

あとは他のみんなの分野でも協力を惜しまないつもりだ。

「他の子たちへの連絡はわたくしの方からしておきますわ」

「ありがとう、ミネット」

とりあえず話し合いを終え、バカンスの日程も決まったし、早速うちへ戻ってクロスたちにも教えてやらないとな。

これから忙しくなるぞ！

◆ ◆ ◆

一週間という準備期間はあっという間に過ぎ去った。

忙しくなると張り切ったままではよかつたのだが、俺ってそんなに持っていくものもないから、ほんの数時間で旅支度は終わったんだよな。

一方、ノエリーやメイ、アリアーヌやフィオナと顔を合わせて話をする事があったのだが、彼女たちはとても忙しそうだった。

通常業務が大変というのものもあるのだが、何よりも気合を入れていたのは水着選び。

今回訪れるリゾート地では、快適に泳ぎ回れるビーチもあるらしく、そこで羽を伸ばそうと考えていた。

なので、みんな水着に着替えるらしいのだが……それはもう凄い気合の入れようだった。

なぜかここでもノエリーとミネットは張り合っているし、準備だけでここまで盛り上がりたとはと苦笑いが浮かぶと同時に、それだけみんなが楽しみにしているんだなっほっこりした気分にもなる。

しかも、今回でついに八人の弟子が勢揃いするというのだから、俺としても興奮は隠しきれない。ノエリー。

ミネット。

フィオナ。

メイ。

ティオグ。

アリアーナ。

ロザリン。

さらに俺がまだ顔を合わせていない最後のひとり——ダリアス。

こうして名前を並べて、現在の役職を想像してみると……とんでもない顔ぶれだなと今さらながら驚愕する。

おまけに、再会するダリアスは俺と同じ王聖六将にも選ばれている。

これからは同僚として一緒に仕事をする仲となるわけだ。

そして迎えたバカンス当日。

いつもより早起きをして荷物の最終確認をしつつ、迎えの馬車を待っていた。

「それにしても、ダリアスかあ」

「懐かしいなあ」

うちの魔獣たちの中でも、クウタとタマはダリアスと面識があるから懐かしの再会になるが、シロンとクロスはまだ顔を合わせていないんだよな。

「主の最後の弟子っすか。どんなヤツなんすか？」

「そうだなあ……リーダーシップがあつて、いつもみんなの中心にいたよ」

「あれだけの曲者揃いをまとめられるのが、主以外にいたとはな」

何気に失礼だな、シロン。

……とはいえ、確かにみんなキャラが濃いよなあ。よくあれだけまとまっていられると思うよ。ただ、それはきつと最後の弟子である彼の影響が大きいと思う。

最年長のしつかり者で、ケンカの仲裁もお手のもの。悩み相談にも積極的に乗ってくれていたし、何より他の子たちがみんな彼に信頼を寄せていたな。アリアーナやティオグでさえ頼っていたから

いだし。

彼も両親を早くに亡くしていたようだけど、もし両親が健在で普通の家庭で育っていたらどうなっていたか……きっと騎士団や魔法兵団が放つてはおかなかっただろうな。それくらい才能に溢れた逸材であった。

「どんな風になっているのか、楽しみだな」

「顔立ちも整っていましたし、きっとハンサムになっていますよ」

「そうだな。きっと異性からの誘いも多いはず」

過去の彼を知るクウタとタマは懐かしそうに呟いた。

……そういえば、あの時に俺が連れていた四体の魔獣のうちの一体が彼によく懐いていたっけ。

あいつはバリバリの戦闘特化型の魔獣で、よく前線に立っていた。

そういうところをダリアスも気に入っていたんだよな。

『僕も将来はこういうパートナー魔獣が欲しいです！』って、いつも言っていたっけ。

そんなことを考えていたら、迎える馬車が見えてきた。

「さて、そろそろか。じゃあ、行ってくるよ」

「「「いってらっしゃい（つす）」」」

俺はシロン、クロス、クウタ、タマに見送られて家を出る。

——そう。

来訪先のリゾート地では、テイマーの相棒であるパートナー魔獣の入場が禁止されていたのだ。

後々この話を聞いた時は断るべきかと悩んだが、パートナー魔獣のみんなが「楽しんでこい」と背中を押してくれたおかげで何の心配もなくリゾート地へと行ける。

いいパートナーを持ったものだよ、ホント。

とはいえ、ミネットもこの制度には納得がいていないようで、現地で認めてもらうよう交渉をするという。

いざとなれば召喚術で呼び出せるし、なんとか成功させてもらいたいところだが……それだと結局、彼女には仕事をしてもらっていることになってしまう。

この辺の線引きが難しいな。

交渉には相手の立場から察して、特に影響力がありそうなティオグやアリアヌといったメンツも参加予定らしいので、なんとか協力して早急に片づけてしまいたい。

馬車に乗り込むと、まずは王城へと向かう。

ここが参加者たちの集合場所になっていた。

「バーツ先生、おはようございます」

「やあ、おはよう、ティオグ」

真っ先に出迎えてくれたのはティオグだった。

それからノエリー、ミネット、フィオナ、アリアヌ、ロザリンがいた。

「おや、今日はきちんと起きられたみたいだね、ロザリン」

「ミネットに叩き起こされたから」

絶望的な方向音痴でもあるロザリンだが、実は朝にも弱くて寝坊の常習犯だった。教会でもよくミネットや他の子たちに起こされていたな。

昔は気弱な子だったけど、今ではすっかりたくましくなったって感心したが、そこは変わっていないようだ。

全員が集まったのを確認し終えたら、ここから馬車を大型のものに替えてリゾート地を目指す。

王都からの距離はそれほど遠くないらしく、早朝に出れば夕暮れ頃に到着できるだろうとのことだった。

二台用意された馬車には俺とノエリー、ミネット、ティオグと、アリアーナ、メイ、フィオナ、ロザリンと四人ずつ分かれる。

本来なら鳥型の魔獣でひとつ飛びといきたいところではあるが、さっきも言った通り、リゾート地は現在パートナー魔獣の出入りを禁じている。

そこで、行きについてはみんなでのんびりと馬車の中で談笑をしながら進むことにした。

こうして集まるのも久しぶりだし、積もる話もあるだろうからな。

——にしても、彼の姿が見えないな。

「ミネット、ダリアスはどうした？」

ダリアスと顔を合わせるのを楽しみにしていたのだが、まだ来ていないようだ。

でも、あのダリアスがロザリンより寝坊して遅刻なんて絶対にあり得ないだろうし、もしかしたら何かあったのか？

そう思って尋ねてみると、ミネットは申し訳なさそうに答える。

「彼は現地へ直接向かうそうですわ。どうしても片づけなくてはいけない仕事があるとかで」

「そうだったのか」

「再会を心待ちにしていましたのに、申し訳ありません」

「なんでミネットが謝るんだ。それに仕事というなら仕方がないよ」

ティオグに匹敵する真面目さがあるからなあ、ダリアスは。まあ、そうでなくては王家から王聖六将の一番手として声をかけられたりはしないか。

ダリアスとの再会は延びたが、バカンスが楽しみであるというのは変わらない。

みんなと過ごす休日……俺だけじゃなく、全員にとっていい思い出になってくれるといいんだけどな。

馬車での移動を開始して数時間後。

俺たちがバカンスを楽しむのはセラノス王国南方にある島で、名前をティディナ島という。

ここは年間を通して気温が高く、まさに常夏の島と呼ぶに相応しい環境らしい。



おかげで一年中、海で楽しむことができるかと評判だ。

さらにその海も透明感があって美しく、泳ぐにはもってこい。

「王都からそれほど離れていないのに、そこまで環境が違うのか」

「ですが、大陸規模で言うところセラノスは年間平均気温で上位に来るそうですよ。私たちは住み慣れているから感じていないだけで、実は外から来る人たちにとっては暑いと感じるのかもしれない」

俺の眩きに、ノエリーがそう教えてくれる。

「ほお、そうなのか。ノエリーは物知りだなあ」

「いやあ」

しかしその横では、ミネットが鼻を鳴らしていた。

「何を照れていますの？　すべてわたくしが教えて差し上げた情報ではありませんか。つまり先ほどの言葉はわたくしに向けて言われたも同然」

「寝言なら寝てから言ってください」

ここでもバチバチと火花を散らすふたり。

そこへ頭を抱えたティオグの囃は、もはやお約束と言っていくくらい見慣れた光景になりつつあった。

しばらくすると、御者から「窓の外を見てください」と声をかけられたので視線を移動させて

みる。

すると——そこに広がる光景を目の当たりにした瞬間、たまらず声が漏れた。

「おお！ こいつは想像以上だな！」

一面が真っ青に染まる広大な海。

果てのない水平線。

現れた大海原の前に、興奮がおさまらない。

「こんなに美しい風景を拝めるなんてな。本当に来てよかったよ」

「ふふっ、気に入っていただけで何よりですわ」

年甲斐もなくはしゃいでいると、同じ馬車に乗っているミネットが微笑みながら話す。

ちなみに、俺たちが寝泊まりする場所は、彼女が時々利用するという別荘だ。

「ここからは見えませんが、あの海で泳げる場所がいくつかありますの」

「泳ぐのもいいですが、ここは食べ物もおいしいんですよ！ 特に海鮮を使った料理はどれも絶品

と評判なんです！」

ノエリーがそう言うのと、ミネットが呆れ顔になる。

「……ノエリーさんは色気より食い気ですわね」

「何か言った？」

「いえ別に」

静かになったと思いきや、対抗心が再燃しているな。

口ではお互いあんな風に言っているけど、お互いを信頼しているし、大切に思っているのを知っているからだろうな。

どんなにケンカをしていても、エヴェリンに捕まったノエリーを助けようと必死に彼女へ体当たりをした幼い頃のミネットの姿が思い浮かんでしまう。あの時の必死の形相は、嫌いな相手にできるものじゃないからな。

「目的地までは、あとどれくらいかかりそうかな」

「海が見えてくれば、もう間もなくですわ。——あつ、あそこに港町が見えてきましたよ」

「おっ、本当だ」

今回の目的地は離島のため、あの港町で船を借り、そこからさらに移動となる。

「もうすぐ到着ですね、師匠」

「ああ。ノエリー、嬉しいからと言って慌ててキャビンから出ないようにな。転ぶといけないし」

「もう、すぐそうやって子ども扱いですから」

いかんいかん。

またしても昔の調子で接してしまった。

これはもう癖くせというか習性というか……あわてんぼうでどこか抜けていたノエリーは、一番年下だったフィオナよりも目が離せない存在だったからな。それが史上最年少で聖騎士になるんだから

世の中本当に分からないものだよ。まあ、それを言ったら俺なんて王聖六将だけど。

港町が近づいてくると、ミネットが不意にボソツとこぼす。

「ダリアスは……きっともう目的地に到着してますわよね」

窓の外を見つめているミネット。

きつと、その視界には景色ではなく、ダリアスの姿が浮かんでいるのだろう。

それは同乗しているティオグも同じだった。

「ダリアスに会うのも久しぶりだな……元気にしているといいのだが」

どこか嬉しそうに語るティオグ。

ふと、彼らが教会で暮らしていた子どもを思い出す。

エヴェリンが子供たちを売り渡していた先は変態貴族だったので、あの教会に暮らしていたほとんどは女の子であった。

周囲の目を欺くために少しだけだが男の子もいたが……それがティオグとダリアスのふたりだったんだよな。

そして、あの事件のあと、彼女を母親のように慕っていた子どもたちのショックは計り知れなかった。

ティオグもまた、信じていた人に裏切られたという気持ちが強く、しばらくの間は口もきけないほど落ち込んでいたな。

そんな彼を救ったのがダリアスだった。

もともと、数少ない男同士ということもあって、ティオグはダリアスによく懐いていたしな。勉強も運動もそつなくこなすダリアスを心から尊敬し、彼のようになりたくて努力を重ねていたな。

そんなダリアスと再会できるなんて、俺も楽しみだが、きつとティオグも同じかそれ以上に待ち遠しいのだろう。

そういえば――

「ノエリー、君は以前、俺がティマーとしての心得を説いた八人が全員パートナー魔獣と契約したって言うていたよな」

「はい。そうですよ」

ノエリーは鋼鉄魔人と。

ミネットは植物人形と。

メイは亡霊竜と。

ティオグは死千蝶と。

フィオナは雪蛇と。

アリアーナは魔吸剣と。

ロザリンは紅鯨と。

それぞれが強力なパートナー魔獣と契約し、活躍を支えている。

だから、セラノスもテイマーの育成に本腰を入れるようになったよな。

ダリアスもまた同じようにパートナー魔獣と契約しているという話を以前ノエリーから聞いたのを思い出したので、詳しく聞いてみることにしたのだ。

「じゃあ、ダリアスにもいるんだな——パートナー魔獣が」

「ええ。ただ、私はまだ見たことがないんです」

「そうなのか？ テイオグとミネットは？」

「わたくしもまだ見ておりませんわ」

「残念ながら僕もです。噂では神獣のようですが」

「し、神獣……」

まあ、本人の持つポテンシャルを考慮したら、それくらいランクの高いパートナー魔獣でないといけないと思う。

うちにもクウタとタマっていう神獣二体がいるけど……ダリアスは俺よりもずっと神獣が似合うな。

けど、そう考えたら楽しみがひとつ増えた。

テイマーとして、彼がどんな神獣と契約をしたのか、そっちの方まで気になりだしたのだ。

そうこうしているうちに港町へ到着。

ここからは船旅になるのだが、目的地であるティナ島はここから見えない。

「今から出港して間に合うのか？」

「心配無用ですぜ、旦那。うちの船はこの辺りで最速ですからね」

船乗りがそう豪語するのはきちんとした理由がある。

俺たちが乗る船に動力として搭載されている魔鉱石は特注品らしく、さらに船も特殊な工法で製造されたもので、なんと海中を移動するという。

「海中を移動する船か……凄い発想だな」

「もともとは嵐の日でも航行できるような船を造るっていうコンセプトだったようですが、海中移動が貴族の方々に大ウケしましたね。急速こちらをメインで運用するようになったんですよ」

確かに、想像しただけでワクワクしてくるような話だけど……海上を進む船に比べて不安要素は多いな。

「安全性に関しては、大丈夫なのか？」

「もちろん、抜かりはありません。仮に水中で何らかの原因で破損した際には、船内に仕掛けられた魔法陣が発動し、防御魔法で船全体を覆い尽くした後、そのまま浮上するようになっていきます」なるほど。

特定の条件を満たすことで発動する魔法陣か……考えたな。

これならどんな状況下でも確実に魔法が発動して浮上できるってわけか。

「ちなみに、これからみなさんが向かうティナ島の至るところに、海底トンネルがあるとされて

います」

「海底トンネル？」

「はい。そこを通れば、島の内部まで海中のみを移動することで到達できるんです」

「それは凄い。もしトンネルが実在するなら、大荒れの日であっても海の底を移動して物資を運ぶことができるな」

「おっしゃる通り。もともと、そのためには詳細な海底調査を行う必要があるため、一体いつになるのやら」

苦笑いを浮かべながら語る船乗り。

海中探索か……実際はそんなロマン溢れる作業ってわけじゃないんだろうけど、非常に気になるな。

「さあ、準備は整いましたんでどうぞ中へ。最高速度でぶっ飛ばしていきますから、ベルトを着用してお待ちください」

乗船の案内を受けると、俺たちは船内へ。

といっても、そこは船というよりさつきまで乗っていた馬車のキャビンに似ていた。

速度重視ということもあり、サイズは最小限というコンパクト仕様。でも、天井が高いおかげか、あまり窮屈きゆうくつには感じないな。

その後、船は事前の説明通りに海中へ。

沈没しないと分かっているけど、さすがに初めて乗ると違和感というか、ちょっと怖さもあるな。しかし、特殊な素材によって加工された強化ガラス使用の窓へ目を向けると、その先に広がるのは見慣れない海中の風景。

先ほどの大海原も感動したが、こっちはこっちでまた違った、新鮮な驚きってヤツがある。

「では航行してまいります」

操縦席は前方にあり、船長といつでも会話が可能となっているものもありがたい。

何かあった時、すぐに指示を仰げるからな。

「凄いですねえ……こんなにたくさんさんの魚が泳いでいる光景を間近で見られるなんて」

「海中というのが信じられません」

ノエリーとメイのふたりは食い入るように窓の外を見つめる。他の弟子たちも初めての海中航行に興奮している様子だ。

何を隠そう、俺もかなり気分が高揚している。

こんなの滅多に経験できることじゃないからな。

「あら？ あれは何でしょうか……」

童心に帰って、船の旅を満喫まんきつしていた俺たちであったが、ふとメイが気になる発言をする。

海中に何かを発見したメイ。

最初はみんな大きな魚程度にしか思っていなかったのだが、続いてアリアーヌが同じ物を発見し、

状況が一変する。

「遠かったのでシルエットしか見えませんでした、かなり大きな生物……この船に匹敵するのではないでしょうか」

「そ、そんなにか!？」

「しかも、魚ではないようですね」

「何っ?」

次々と明らかになる新情報。

「魚じゃないとするなら、海老とか蟹とかクラゲとかか……?」

可能性のありそうな生物をあげていくが、メイもアリアヌも、そうではないと首を横へ振る。これに反応したのはティオグとミネットだった。

「ほお、つまりふたりが目撃したのは未知の海洋生物である可能性が高い、と……ふっ、実に興味深い」

「同感ですわね。誰も発見していない生物ならば、いろいろと利用価値があるかもしれませんし」
純粋な好奇心でシルエットの正体を探ろうとするティオグと、何でも商会の利益へつなげようとするミネット。

考えていることは正反対でも、「シルエットの正体を知りたい」という目的については同じなようだった。

俺もどちらかというふたり寄りの意見であつたが、中には違う考えを持った者もいる——ノエリーとフィオナだ。

「いやいや、ちよつと……怖いこと言わないでくださいよ」

「そ、そうだぞ! これから楽しもうって雰囲気だったのに怖くなってきたじゃないか!」

猛抗議するノエリーとフィオナ。

ふたりはこういう、ちよつとオカルト入った話って苦手だったかな?

すぐ横にオカルトの塊み^{かたまり}たいな亡霊^{ファンタム}をパートナー魔獣^{マジックビースト}にしているメイがいるんだけど、そつちは平気なのか?

「船長、今の話は聞こえてまして?」

大事^{おおいじ}になるといけないからと、ミネットは正面にある運転席へと声をかけた。

「もちろんです。しかし、こちらからは何も確認できませんでしたね……それに、そんなに大きな生き物がいたという目撃情報は今まで一度もありません。見間違いでは?」

「だいたいのですが……」

「そう願いたいです……」

アリアヌもメイも納得はしていない様子だった。

不穏^{ふおん}な空気がよぎつたものの、その後は何事もなく目的地に到着した。

なんとか無事にテディナ島へ来られてよかったよ。

「すみません、バーツ様……私が最初に変なことを言ったせいで、みんなの空気が悪くなっちゃいました……」

「何を言っているんだ。君は何も悪くないよ。それに、みんなだつて気にしていないさ」

「そうですよ、メイさん。私も同じような発言をしてしまいましたし、あなただけが責任を感じることはありませんよ」

アリアーヌが声をかけたことで、メイは振り返る。

そこには彼女を心配する六人の仲間がいた。

「みんな……ありがとう」

うんうん。

こうやって失敗をフォロワーし合えるのもみんなのいいところだ。

もっとも——メイとアリアーヌが目撃したという謎の影については、本当に見間違えという失敗で片づけてよいのかという疑問は残る。

幸い、俺たちの乗る船を襲ってくるようなことはなかったが……これからも同じように何もしてこないとは限らない。船長は見たことがないと言っていたが、もしかしたら別の海域からこちらへ移ってきた可能性もある。

とはいえ、そもそもシルエットの正体がハッキリしていない以上、海中の探索を要請するのは難

しいだろうな。

そもそも、どうやって海中を調べるのかって疑問が残ったままだけど。

「師匠？　どうかされましたか？」

考え込んでいると、ノエリーに声をかけられた。

いかんいかん。

今日はせっかくのバカンス。

海中に出現したシルエットに関しては気になるところではあるが、現状では調べようがないし、もう少し様子を見てからにしよう。

船着き場から歩いて数分も経たないうちに、賑やかな通りへと出た。

俺たちが上陸したテディナ島は島全体がひとつの巨大な観光スポットとなっているとのことで、その評判通り大変混雑している。

セラノスとしても、ここに力を入れて産業規模を拡大しようという狙いがあるのだろう。

「わあ！　賑やかですね！」

早速テンションが爆上がりしているノエリー。

確かに、賑やかという点では王都と同じだ。

だが、異国情緒が漂っていて、雰囲気が全然違う。

「わたくしは何度か来ましたが、相変わらず人が多いですわね。まあ、商人としては他国からの観光客が増えるのは望ましいと言えますわ」
なるほど、他国の観光客も多いのか。

「だからこそ、国王陛下も注目されているのです」

「でも、そうすると治安維持の観点で課題が複雑化し、対応が難しくなりそうですね」

「さすがだな、メイ。だからこそ僕も——」

「三人とも！ ここへ来たからには仕事の話はご法度ですよ！ もっと楽しみましょうよ！」

ノエリーがそう訴えると、ミネツト、メイ、ティオグの三人はハッと我に返る。

真面目なあの子たちらしいし、師匠として頼もしさを感じる——が、今はノエリーの言うように、このリゾート地を楽しんでもらいたい。

「みんな、このリゾート地にいる間は仕事を忘れて楽しもう！」

「そうだそうだ！ せっかくの楽しいバカンスなんだから！」

「それに、こうしてみんなが集まる機会なんてなかなかないのだから」

「言われてみれば……確かに顔を合わせるのは久しぶりだな」

「ふふっ、放浪しているあなたが一番会う機会がありませんものね」

フィオナとアリアーナの言葉がダメ押しとなり、仕事熱心な三人もようやくリゾート気分気持ち切り替えたようだ。

「僕としたことが……バーツ先生の前でなんという失態を……こうなったら、このリゾート地を全身全霊をかけて楽しむ！」

……前言撤回。

ティオグに関しては根本的に考えを改める必要があるようだ。元弟子の中で一番真面目だったけれど、それがこういう形でマイナスに働くとは。

賑やかなメイン通りは立ち寄ってみたいと思える店が多い。

まずはミネツトの別荘へと向かい、荷物を預けてから改めてこっちに戻ってこようという話になった。

その別荘だが……想像を超える大きさだった。

「凄いついていうのは予想していたけど、ここまでとは……」

開いた口が塞がらないとはまさにこの状況を言うんだろうな。

どうやら、俺はミネツトの大富豪ぶりを過小評価していたようだ。

ちなみに、他の弟子たちは把握済みだったようで驚いてはいなかった。

屋敷内ではすでにメイドたちが準備を整えており、まずは二階にある部屋へと案内される。

しかし、冒険者をしていた頃はこういう豪邸って縁遠いものだと思っていたけど、最近足運び機会が増えたよなあ……その日の食事代すら稼げずに腹を空かせていたのが懐かしくさえ感じるよ。

とりあえず、荷物を置いたら玄関へ向かうか。

部屋を出て階段を降りると、すでにノエリーとミネットが待っていた。

何かと互いをライバル視しているふたりだが、今は仲良く談笑中——いや、普段からこれくらい仲はいいんだよな。変に煽り合わなければ。

「あっ、先生！——むっ?」

バツチリのタイミングで声が重なる。

ここまでくるともうわざとじゃないかかって疑いたくなるよ。

声が重なったことでいつもの口論に発展。後から来たメイは苦笑いを浮かべ、ティオグは頭を抱えている。

その後、フィオナとアリアーナも合流し、残すはロザリンだけとなった。

「遅いですねえ」

「ロザリンはいつもこんな調子じゃない? 大方、ベッドがフカフカで気持ちよさそうだからその

まま爆睡しているに銀貨二枚!」

「もう、ギャンブルはダメよ」

アリアーナにたしなめられるフィオナ。相変わらず、このやりとりは本物の姉妹のようだな。

その後もなかなかロザリンが来なかったので確認したところ、フィオナの予想通り、ロザリンは熟睡中だという。

やれやれ、そういうところは昔とちつとも変わっていないな。

寝坊助のロザリンはメイドたちに任せ、俺たちはひと足先にティディナ島を楽しませてもらうとしよう。

再び中心街へ戻ってきた俺たち。

王都とは質の違った賑わいを見せるが、その要因となっているのが観光客の存在だろう。

王都内に立ち入るには許可が必要となっているのだが、この辺りはそういった制限が設けられていない。

貴族も多く利用しているが、平民の利用する場所とは区画分けがされており、こちらへ来るケースは少ないという。

「確か、ビーチがあるのは貴族の方の区画なんだっけ?」

「はい。明日はそこでちょっとしたイベントも行われる予定でして、わたくしたちも参加してみようかと」

「イベントかあ……ちなみにどんな内容なんだ?」

「いろいろありますのよ。詳しい内容につきましては……当日のお楽しみということで」

「イタズラっぽく笑いながら言うミネット。うーむ、実に気になる言い方だな。」

でも、彼女が言うのだから期待が持てる。

ビーチでのひとは明日に持ち越し、今日はこっちで楽しむとしよう。

「それにしても、本当に店が多いなあ」

「新たな商業都市として栄えてもらいたいと、わたくしたちの商会も力を入れてはおりますの」

「ミネットの商会が力を入れていとなると、こいつは相当本気なんだなって伝わってくる。」

「あっ！ あっちにおいしそうな屋台がありますよ！」

「ノエリー、落ち着いて。屋台は逃げな——ああ、そんなに勢いよく突っ込んでいたら逃げられますよ」

メイはすっかりノエリーのお守り役が板についてきたな。ノエリー本人に言ったら「そんなことありませんよ！」と怒られそうだから黙っておくか。

お守りといえば、アリアヌとフィオナもまさにその関係がピッタリ当てはまる。特に、アリアヌが王都に留まるようになってからはよく一緒に行動しているらしい。

各々がそれぞれのスタイルで楽しんでる中、ティオグは何やら腕を組みながら屋台の店主らしい中年男性と話し込んでいた。

最初は商品の説明を受けているのかなと思っただけだが……どうにもティオグの表情が険しい。最近になって分かったことだが、彼が仕事抜きの話をしている時つてもっと露骨に表情が柔らかいんだよな。

骨の髄まで真面目人間なんだなあと苦笑いを浮かべるが、先ほどバカンスを楽しむと宣言したばかりだということを考えると……ひよつとして、かなり複雑な案件でも発生したか？

確かにティオグは真面目な仕事人間だが、これほど早く自分の発言を覆すだろうか。

そんな疑問を解決すべく、俺は彼に声をかけてみた。

「何かあったのか、ティオグ」

「バーツ先生——あっ！ いやっ！ これは決して仕事というわけではなくて！」

「慌てるな、ティオグ。君がバカンスを楽しむと言った矢先に、あんな顔をしてまで聞き入る話だ。きつとこの国に関わる重大な話なんだろう？」

「……さすがはバーツ先生。僕の嘘をあつさり見破ってくるなんて」

それに関してはティオグが分かりやすい態度だからなんだけど……まあ、話が脱線しそうだし、このままでいいか。

それよりも問題は俺の読みが的中していたことだよ。

「一体何が気になったんだ？」

「この花を見てください」

そう言ってティオグが指差したのは、藍色をした見慣れない花だった。

俺も草花に造詣が深いわけじゃないけど、少なくとも見たことはないな。

「この花がどうかしたのか？」

「実はこれ、バフレシアという名前で、花粉から作られる毒薬はドラゴンさえイチコロだと言われるほどなんです。それゆえ、セラノスでは取り扱いが法で禁じられています」

「えっ!？」

それはまずいな。

この店主、違法な花を売り捌いていたのか。ティオグはそれを店主に問い詰めていたというわけだな。

「ま、待ってくれ！ それは客の忘れ物なんだ！」

しかし、そう必死に訴える店主。

見え透いた嘘のようにも聞こえるが、ティオグは彼を拘束しようとしなない。

「そいつの言ってることは本当だ、信じてやってくれ」

「ああ、あやしい商売をするやつじゃない」

そう、周囲の店の関係者たちが口を揃えて店主の無実を訴えていたからだ。

そんな中、一人が俺に向かって問いかけてくる。

「あんた、この兄ちゃんの上司かい？ この兄ちゃんも随分偉いらしいが」

「いや、俺は——」

「その通りです。こちらの御仁は僕が尊敬してやまないバーツ・フィリオン先生です」

その言葉に、一気にざわつく周りの人々。

すると、人だかりに気づいた自警団の兵士たちがやってきた。

「おい！ 一体何の騒ぎだ、これは！」

「ああ、お騒がせをして申し訳——」

「バ、バーツ・フィリオン殿!？」

ムキムキのいかつい兵士たちは、なぜか俺の顔と名前を知っていたらしい。

深々と頭を下げながら謝罪の言葉を述べる。

「このたびは無礼な口の利き方をしましてしまい、誠に申し訳ありませんでしたあ！」

「ええっと、何でそうなる？」

屈強な偉丈夫たちが揃いも揃って謝り倒している。

この異常事態に店の人たちも困惑しているようだが……誰よりも俺が一番戸惑っているんだよなあ。

慌てふためいていると、唯一現状を的確に把握しているらしいティオグが説明してくれた。

「彼らはバーツ先生の活躍を知っているようです」

「活躍ねえ……」

頑張ったのはバートナー魔獣であり、俺は後方から指示を出しているだけ。だから、俺の手柄みたいに扱われるのは慣れないな。

すると、先ほど一番声が大きかった男性が、改めて頭を下げてきた。

立ち読みサンプル
はここまで

「私は自警団のまとめ役をしております、ライリーと申します！ このセラノスに巻き起こったテイマー旋風の火付け役でもあるあのバーツ殿に、我ら自警団一同、尊敬の念を抱いております！」
「ど、どうも」

「それに、我らの雇い主でもあるトラビス代表も、同じ王聖六将の候補者であるあなたを高く評価されています」

「トラビス代表って……そうか。君たちは彼のところから派遣されてきた傭兵か」

トラビスとは、俺と同じく王聖六将に名を連ねる人物で、先代から引き継いだ地盤をもとに、傭兵を派遣する商會を営んでいる。まだ十歳の少年だが、その商才はすでに超一流の領域に達している。だからこそ、あの幼さで王聖六将に選ばれたのだろうな。

俺も実際に会って話をしたことがあるけど、本当に十歳とは思えないくらいしっかりしていたし、何より彼には人を惹きつける不思議な魅力がある。

どうやらこの島の自警団は、彼の商會のところから派遣されているようだ。

「なるほど。トラビスが見立てた兵士というなら優秀に違いない」

「おお……あなたにそう言っていただけるとは光榮の極み——ですが、そんな御方にあのような態度をとってしまった自分を許せません。死んで詫びをせねば！」

ライリーさんはそう言っただけで剣を抜こうとする。

「どわあっ!? ストップストップ!?!」

いくらなんでもこれが原因で死なれたら俺が困るよ。

「あれくらいなら平気だから、その剣をしまってください！」

「な、なんと寛大な……」

だから大袈裟だったの。

まあ、ともかく思い留まってくれてよかった。

気を取り直して、俺たちは違法植物の件を彼らに伝えた。

「それはなんとも奇妙な……そもそも、こんな危険な植物をどうやって持ち込んだのか」

「心当たりはありませんか？」

「お恥ずかしながら、皆目見当もつきません……くっ！ 自警団の団長を任されているのにこの不甲斐なさ！ 自分が情けなくなってきました！ この上はやはり腹を——」

「それはやめてくれ!!」

隙あらば腹を切ろうとするんだから……それよりも、こいつの侵入ルートが分からないというのは問題だな。

とりあえず、あの植物が置かれていた屋台の店主から詳しい話を聞くことにした。

とはいえ、店主もあまり知らないようだ。

「あの植物は気がついたら店先に置かれていたんです。そちらのティオグ殿に声をかけられるまで存在にすら気づいておりませんでした」